



ハノイ、ベトナム革命博物館

「革命」という歴史と博物館

ベトナム戦争が終結してまもなく35年を迎えるベトナム。戦争を知らない大人たちが増えるなかで博物館の役割は変わりつつある。自らの歴史を新たなかたちに更新する動きも見える



ベトナム革命博物館正面入口



レジスタンスにもちいられた武器類が並ぶ展示

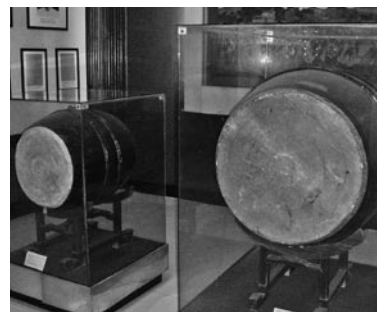
とが主たる目的だったが、時間を見つけて博物館の展示を見せてもらった。

民衆文化からも「革命」が透けて見える

まったく自慢にならないが、私は昔から、先生や友人に「君には政治や権力という視点がない」「君と政治論争してもしょうがない」とことあることにいわれてきた。自ら省みても積極的に否定する根拠も見つからず、なるほど自分は生来非政治的人間なのだとはあきらめ、半ば納得して今日に至っている。そんな

私なので、「革命」と聞くだけで妙に緊張し、身構えてしまう。しかし、それも私の考えすぎで、政治性やイデオロギー性をあまり意識せずに展示を見ることができたのである。

ベトナムという国の成立の経緯を考えると、



展示では武器類や写真と並んで太鼓も並ぶ

「革命」は、不可避かつ重要な問題である。つまり「革命」は、ある意味ベトナムの歴史だということを、私は展示をとおして理解することができた。しかもそこでは、ベトナムの人びとの間で用



専門は民俗学、民俗芸能研究。最近九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

ささはら りょうじ
民博 民族文化研究部

いられてきた太鼓やゴングや角笛が、レジスタンスの連絡や警戒用の道具として展示され、「革命」という歴史が一部の階層に止まらない、民衆文化次元での広がりも有していたことがうかがえて感慨深かった。

多様な歴史認識が響きあう世界の実現に向けて

この博物館は数年後、近くにあるベトナム歴史博物館と統合され、ハノイ郊外に新たにできる大規模な国立歴史博物館となる。私を案内して

くれたスタッフも、近々その開設準備室に異動するという。そうしたベトナム革命博物館の発展的解消ともいべき事態は、穿った見方をすれば、時代や社会の変化に呼応し、ベトナムが自らの歴史を、自ら新たなかたちに更新する動きといえなくもない。とすれば、それも必ずしも否定的にのみ捉える必要はなくなる。

そのスタッフは個人的な見解と断りつつ、せっかくならJICAの研修で民博と縁ができたのだから、新しい歴史博物館づくりでも民博と連携・

協力できればと話していた。さまざまな面で世界規模の一元化の進行の弊害が顕在化している今だからこそ、それぞれの国や地域による多様な歴史認識が賑やかに響きあい、対話や議論が活発に繰り広げられる状況の構築が重要となる。

そんなポリフォニック(多声的)な歴史の実現の一翼を、世界各地の博物館とともに民博が担うことができればさぞかし愉快だろうというのが、ハノイで抱いた私の個人的見解である。